
赤ずきん ~もう一つの物語~

鹿野 魁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

赤ずきん～もつ一つの物語～

【Zマーク】

Z5969D

【作者名】

鹿野 魁

【あらすじ】

むかしむかしあるところに、赤いずきんをかぶった女の子がいました。女の子はある日、おばあさんの家へ向かう途中に「狼」と名乗る男と出会います。もしかしたらあるかもしれない、赤ずきんのもう一つのお話。

むかしむかし、一人の女の子が居ました。女の子はおかあさんと一緒に、町から離れた森の入り口に住んでいました。女の子は、いつも赤いズキンをかぶっていたので、おかあさんからも、森の奥に住んでいるおばあさんからも「赤ずきん」と呼ばっていました。ある日、赤ずきんはいつものようにおばあさんのところへ行こうとしました。するとおかあさんは

「ついでに、おばあさんにこのワインを届けてちょうだい」と、かごの中にワインを入れながら言いました。そして

「お腹が空いたために、パンケーキを入れておくわね」と、かごの中にぶしほどのパンケーキを一つ、入れました。

赤ずきんはおかあさんに手伝つてもらつて仕度を済ませた後、かごを受け取ると「いってきます」と、元気良く家を出て行きました。赤ずきんは、おばあさんの家までの道のりを迷うことなく進んでいきます。

毎日のように通つているので、道をすっかり覚えているからです。おばあさんの家まであと半分、といつところで、赤ずきんは男を一人、見つけました。男は少し遠くの木々の間を、うらうらと歩いていました。

「ねえ、どうしたの？」

赤ずきんが大声で尋ねると、男は赤ずきんのもとにやつてきました。

「人を探していたんだけど、迷つてしまつてね。君が声を掛けてくれて助かつたよ」

男はそう言つと、照れくさそうに頭をかきました。

赤ずきんは大人なのに迷うなんて変なの。と言いましたが、男はその言葉に苦笑ただけでした。

「あなたはなんていう名前なの？」

赤ずきんが、もつ一度男に尋ねました。

「狼、つて呼んでくれたらいいよ」

「狼 変な名前」

そういうた後に赤ずきんは、狼。と口の中で小さく復唱しました。

「君の名前はなんだい？」

今度は狼が尋ねました。

「赤ずきん」

「君の名前も、ずいぶん変わつているんだね。もしかして、そのずきんと関係があるのかな」

「そうだよ。良く似合つてしまふ」

赤ずきんはそこで初めて、男に笑顔を見せました。

「うん。とてもよく似合つてゐるよ」

やう言つて狼は、ずきんの上から赤ずきんの頭をなでました。

「ところで、赤ずきんちゃん。君はこんなところで一人、何をしてゐるんだい」

男はかがんで赤ずきんと田線を合わせました。

「おばあさんのところに行くの」

「そうか。……おばあさんの家はどこかな？」

「あつち」

そういうと赤ずきんは、自分が先ほどまで進んでいた方向を指差しました。

「今日はおかあさんに渡されたワインを持つていかないといけないの。だからもう、行かなくちゃ」

「でもね、赤ずきんちゃん。ここにはこんなに花が咲いているのに、赤ずきんちゃんは花を持つて行こうとは思わないのかな」

赤ずきんが辺りを見回すと、確かに、色鮮やかにいろいろな種類の花が辺り一面に咲いています。特に、赤色の花の匂いをかぐと、気分がよくなつてきます。

「でも、遅くなつたらおばあちゃんに怒られるから……」

花を見て輝いた瞳は、今はもつ、伏せられていました。

狼は立ち上がると、両手を広げて言いました。

「大丈夫だよ。お花をお土産に持つていつたら、おばあさんもきっと喜ぶよ」

「そりかなあ」

赤ずきんは、狼を見上げて言いました。

「そうだよ」

「……じゃあ、行つてくるね」

狼の言葉に赤ずきんは、花畠の中に入つていきました。

赤ずきんが花を摘み始めてから、しばらくたつた後。

「コンコンコン……」

おばあさんの家の戸が叩かれました。

「赤ずきんかい？ 戸は開いているから早く入つておいで」

おばあさんは、暖炉にかけた大きな鍋をかき混ぜながら言いました。

扉が開いて、誰かがお婆さんの家に入つてきました。

家中は一部屋しかなく、暖炉は扉の反対側に位置しているので、おばあさんには入つてきた人は分かりません。

「新しい薬が出来たからね。また、飲んでもらいたいんだよ」

おばあさんがかき混ぜている鍋の中には、どろどろに煮詰まつた、紫色の液体が入っていました。

暖炉の傍の壁には、かえるの足の干物や、瓶詰めにされたウサギの肝などが置いてありました。

「ほら、赤ずきんや」

おばあさんは鍋の中の液体を、カップに注ぐと振り返りました。

「誰だい、あんたは！」

驚いたおばあさんは、カップを取り落としてしまいました。家に、カップが割れる音が響き渡ります。液体の触れた場所は、不気味な音を立てながらあり得ない色に変わりました。

お婆さんの家にやつてきたのは、お婆さんの知らない男でした。

「教皇直属、エクソシスト部隊の一員、狼と申します」

男はそう言いながら、優雅にお辞儀をしました。

「もう会うことはないでしょうから、覚えなくても結構ですよ」
男の顔に浮かんだ笑みは、先ほど赤ずきんに見せた優しげなものと正反対でした。

「狼……？」

おばあさんには狼の言葉の意味が分からなかつたのでしょう。眉をひそめておばあさんは咳きました。

「知りませんか。 それではスコールとハティと言つ」一匹の狼のお話はご存知ですか？」

「太陽と月を追い続ける兄弟の狼だろう。 それくらいは、知つてゐるさ。 私も魔女の端くれだからね」

おばあさんは警戒しながら答えました。

「おや、自分が魔女であることを肯定しましたか…… それはさておき、話の続きをしましょう。

あなたの仰るとおり、スコールは太陽を、ハティは月を追いかけています。世界が終わるときには、一匹は太陽と月に追いついて飲み込んでしまうと言いますが、さて、この太陽と月は一体何を象徴しているのでしょうか」

「そんなの知らないね」

おばあさんの警戒は、未だ解けませんが、狼は構わずに話し続けました。

「そうですか。 まあ、これは鍊金術師の分野ですし、知らないのも無理は無いでしきう。

太陽と月は、鍊金術において精神と魂を象徴しているのです。

ここまで言えば、僕がどうしてあなたの前に現れたのか、お分かりになると思いますが」

「私を殺しに来たのかい」

「それだと少し、語弊がありますね。 言つたでしょ？ 僕はあなたの『肉体』を食べに来たわけじゃない。 具体的に言つと『知識』

をもう一にきたんですよ

「どういふことだい」

「——の後、あなたは僕に教会に連れて行かれます。そこで異端裁判にかけられるわけですが、間違いなく有罪になるでしょう。特にあなたは、先ほど自分で自分が魔女だと認めましたからね。ですが、『魔女は殺したいが、魔女の知識は欲しい』と言つたところなのでしょう。あなたたちの知識を持ち帰ることが、僕たち 狼の役目なんですよ。

といふことで、あなたにいくつか質問しますが、答えてもらえますよね?」

あばあさんは、はつ。と小さく吐き捨てると言いました。

「そう言われて、おとなしく教えると思うかい」

しかし狼は、余裕の表情で言い返しました。

「なぜ、僕がわざわざこんな長い話をしたと思いませんか? 僕は、生まれながらにおかしな能力を持つていましてね。自分が魔女と言われないように、『狼』に所属しているのですが」

そこで狼は、壁際にあるおばあさんのベッドに腰掛けました。

「僕と相対している人が、僕の話を聞いて、これから自分の身に起ることを理解したときに限り、僕はその行動のみ起こさせることが出来るんですよ。試しに一つ、質問してみましょうか。

赤いズキンを被っている少女の髪が、血のよう赤いのはなぜですか?」

おばあさんに喋るつもりはありませんでしたが、気が付くと言葉がかつてに口を付いて出していました。

「あの子は、私の実験台なのさ。ある日、即効性のある毒を飲ませたら、なぜか死なずに髪が赤くなつたんだ……どうして赤ズキンの髪が赤いのを知っている

「尋ねているのは僕なのですが……いいでしょう。

彼女にあつたのですよ。森の中でね。彼女と目線を合わせるためにかがんだとき、ズキンからはみ出していたんです。

では、次の質問です。彼女のずきんにどこかで血が付いていたのはどうしてですか？ 血の状態から、どうやらつい最近に付いたようですが、

狼の質問を聞いたおばあさんは、いきなり、大声で笑い出しました。

「知らないよ、予想はつくけどね。あと、赤ずきんでの解剖をするときはいつも裸にするんだ。だからその血は、私のせいじゃない。ちなみに、赤ずきんの身体にある痣も、私の仕業じゃない」

抵抗しても無駄だと知ったおばあさんは、抗うことなく言葉を紡いでいきます。

「そうですか……では、次の質問です。

魔女のぐせに、このような人気の無いところに一人きりで住むとは珍しいですね。本来ならば大勢の魔女が居るところに住んで、魔女集会などにも行くでしょ？」なぜですか？」

「別に、一人つて訳じゃないさ。でも、大勢は嫌いだからね。一人も居れば十分」

「ノンノンノン……

おばあさんは狼の質問に答えようとしましたが、ノックの音に遮られてしまいました。

「誰だい？」

おばあさんが問いかけてます。

「私よ。赤ずきんよ」

「そうかい。扉は開いているから、入つておいで」家中に入ってきた赤ずきんは、首を傾げました。

「どうして狼さんがここに居るの？」

「ちょっと、ね。君のおばあさんに用があつたんだ」ベッドに座つたまま、狼は優しげに言いました。

「ふん。よく言うよ 赤ずきん、何を持ってきてくれたんだい」

「おかあさんから頼まれたワインを」

「そう言いながら赤ずきんは、か「」をおばあさんに渡しました。

「おや、ここのパンケーキはなんだい？」

おばあさんは、ワインの入ったかごをそばのテーブルに置くと、一つだけ入っていたパンケーキを掴みました。

「おかあさんが、お腹が空いたときのために。つて作ってくれたの」「そうかい。じゃあ、赤ずきん。あなたは明日からもう、来なくて良いよ」

おばあさんは、赤ずきんに向けて微笑みました。そして、狼を睨んで

「あなたの思い通りにはさせないよ」と、パンケーキにかぶりつきました。

赤ずきんと狼が唖然としている前で、おばあさんはパンケーキを飲み込みます。

そして、おばあさんは血を吐いて倒れてしまいました。

「しまった！」

狼が慌てておばあさんの傍に駆け寄りますが、もう、手遅れでした。

赤ずきんの目は虚ろです。

「どうしたんですか！」

開けっ放しになっていた扉から、男が入ってきました。男は、近くの村に住んでいる獵人でした。

獵人は、おばあさんを見て一瞬眉をひそめましたが、赤ずきんを見た次の瞬間、目を見開きました。

「×××！ もしかして×××じゃないか？」

獵人が呼んだその名は、もうほとんど使われていなかつた赤ずきんの名前でした。

「失礼ですが、あなたは？」

狼が尋ねます。

「ここの子の父親です。以前は妻と暮らしていたのですが、ある日突

然居なくなつてしまつて」

「そうですか。 ところであなたはこいつらの方を存知ですか？ 石自体には興味が無いので、お知り合いでしたら埋葬などはそちらで」

「石……？」

「ああ、すいません。 どうしても回りくどい話し方をする癖があります。 石とは身体のことです。 錬金術ではそれが象徴なんです」 狼が話を進めていきます。 その傍らで赤ずきんは、おばあさんの遺体をじっと見つめていました。

「ああ、なるほど。 しかし、初めて見た方です。 …… ところで、あなたは錬金術師なんでしょうか。 それに、状況も教えていただきたいのですが」

「あなたの疑問ももつともです。 しかし、申し訳ないながらお教えるわけにはいきません。 ただ、教皇様の『ご意思とだけ……』」

「分かりました。 では、その方のご遺体は」

「ええ、こちらが責任を持つて埋葬させていただきます。 ただ、問題はその子ですね。 引き取られますか？」

狼と狩人の視線が赤ずきんに向けられます。

狩人が口を開きました。

「どうする？ お父さんと一緒に住むか？ それともおかあさんのほうが良いなら」

「お父さんと一緒に住む」

狩人の言葉をさえぎって、赤ずきんが言いました。 それまでは打つて変わつて、きつぱりとした口調でした。

そして、赤ずきんは狩人を見上げ付け足しました。

「だつて、おかあさんは死んじやつたもの」

赤ずきんの顔には、笑顔が浮かんでいました。

こうして赤ずきんは、狩人と一緒に暮らすことになりました。

めでたし、めでたし。

さて、皆さんは質問です。

持ち物がかごしかない赤ずきんは、一体何の仕度をしたのでしょうか。

どうして、お姫さんに仕度を手伝つても「もう必要があつたのでしょうか。

始めに「あつたパンケーキは、おばあさんが食べた頃には一つしかありませんでした。もう一つはどこへいったのでしょうか。赤ずきんの身体の痣は、一体誰がつけたのでしょうか。ずきんに血が付いていたのはどうしてでしょうか。もう一人の魔女とは誰でしょうか。

赤い花とは、何の花でしょうか。

いつの間におかあさんは死んでしまつたのでしょうか。本当にこの話はハッピーエンドなのでしょうか。

めでたし、めでたし……？

(後書き)

08/02/05

投稿

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5969d/>

赤ずきん～もう一つの物語～

2010年10月8日15時43分発行